【様式①】令和５年度　学校評価書（幼稚園）

園名　岐阜市立岐阜東幼稚園

園長名　　藤井　佐由美

市の重点課題	園の重点項目	自己評価	達成状況	改善の方向
希望あふれる未来を自ら拓く力をを育むための教育課程の編成	・子どもの心がときめく瞬間（とき）に寄り添う教育を推進し、知的好奇心や探究心を育むための環境構成や援助のあり方を明確にする。 ・実体験重視を前提に、ICTの活用を推進し、子どもの興味関心を深めるツールとしての充実を図り、デジタル・シティズンシップ教育を推進して、豊かな保育実践を構築する。 ・園全体の協力体制のもと、一人ひとりが充実感をもって過ごし自己発揮し、自分や仲間の良さを認め合う関係作りに努める。身近にいる生き物にふれる中で、生命の神秘や不思議に気づき、徐々に大切にしようとする力を育む。	A	・主体的に遊び出せる環境を考え実践し、興味にあった夢中になれるものを探ったりしながら関わることができた。その中で、子ども一人一人の問いや願いをつかみ、何に心をときめかせているか読み解いたり、遊びの深まりにつながる環境構成や援助を行ったりした。それにより子どもの好奇心や探究心が深まった。 ・ICTの活用では、タブレットとマイクロスコープを用いて、子ども達が、草花や氷の細部を撮影したり、知りたいことを調べたりしながら、親しみをもち、遊びをより豊かにするものとして定着した。また、加納幼稚園や長野県の保育園とオンラインで実際につながり、子ども達が遊びの紹介をタブレットのkeynoteアプリを活用して制作したクイズ形式で行ったり、金華山や岐阜城等、岐阜市自慢をしたりする中で、岐阜の良さを知ったり、愛着をもったりする姿に繋がった。年中児にとっても、大切に飼育している魚（カマツカ、アブラハヤなど）の飼育方法を調べるためのツールとして活用したり、ダンスや折り紙の折り方等を動画で観たりすることを通して、主体的な行動を引き出すことができた。 ・年長組では、『こどもかいぎ』を実施し、自分の思いを出したり、仲間の思いに気付いたりする中で、新しい考え方に出会い、相手の思いを尊重したり、大切に思ったりする気持ちが育まれている。また、日常的な対話を繰り返すことにより、安心して自分の思いを出せる場となり、自己肯定感が高まり、互いに認め合う関係性へと育ってきている。 ・地域の身近な自然と触れ合う機会を大切にたり、継続的に飼育観察したりしてきたことにより、「死」や「新しい生命の誕生」の場面に出会い、子ども達が、命の神秘や不思議を実感し、愛着をもち接する姿に育った。	・引き続き、直接体験をベースとしたICTの活用について、職員が様々な利用方法を探りったり、学んだりしたりして活用の幅を広げる。 ・子どもの思いを考え、行為の裏にある内面を深く読み解き、その記録を丁寧に綴ることにより、育ちや変容を捉え、評価の指標とする。
あたたかさと働きがいにあふれる園づくり	・すべての職員が主体的に、保育を展開するための感性、人間力の向上を図り、自分なりの意見をもち、伝え合える集団作りに努める。 ・教師一人一人が持ち味を活かした役割分担と、自主性を育成し、遊びを広げ深める教育実践を推進する。	A	・子どもを真ん中においた行事や生活の営みを送れるよう、子どもたちに投げかけ、自分たちで考えて決めていくことを大切にしてきた。教師も子どもと共に遊びを楽しみ、心を動かすことで、子ども自身も遊びに興味が増し、一緒に考える楽しさを味わうことにつながった。 ・ドキュメンテーションを生かした記録を取り、研究会で話し合うことで、遊びの振り返りや子どもの様子が分かり、今後の援助や方向性を見出しやすくなった。それにより、子どもの気持ちに寄り添ったり、興味や関心に迫ったりすることができるようになった。 ・研究会にて、世代間交流をしたり、同年代の交流を行ったりして、いろいろな視点から子どもの捉え方や支援、環境設定の在り方を学ぶことで、保育の幅を広げることができた。 ・活動ごとにねらいと内容を立案したことで、職員がそれぞれの担当業務を中心に、責任をもち優先順位を考えながら、効率的に実践することができた。 ・担任やサポーター等ともコミュニケーションを図り、幼稚園やクラスの担任の意図や思いが分かって保育に臨めるようにしたことで、子どもにとって一貫したかかわりが出来るようになった。 ・園内の特別な支援を必要とする子どもの割合が4割ほどあるが、その子ならではの有効的な支援方法を探り、個別の教育支援計画、個別の指導計画などを作成・活用し、全職員、保護者と協働してかかわることが出来た。それにより、関係機関の担当者と情報共有しながら、集団と個別での育ち合いを確かめ合い、各々の役割を果たしながら連携することが出来た。	・個々が研修参加や参考文献を通して、学びを深め、自己研鑽に努めながら資質向上を図る。
全教職員の共通理解・共通行動による指導体制の確立	・園長のリーダーシップのもと、教頭・主任が中核となり、全職員が参画するとともに、各担任が幼児理解に努め意図性を発揮することにより、保育の充実を図る。 ・6年目を迎えるコミ・スクの組織を活用し、地域力を生かした行事の工夫を図り教育活動の啓発を行う。	A	・子ども達が、興味関心をもった遊び、年少児では、ホールでのコンサート（表現・制作活動）、年中児は、飼育している魚の死をきっかけに、色々調べたい、知りたいという思う気持ち、年長児は、鏡の不思議など、園全体で深い学びに向かう遊びとなり、全職員が幼児理解に努めることにより、子ども達の創造性と探究心の高まりへと繋がった。 ・地域との協働により、泥んこ遊び、稲刈り、もちつき、木のおもちゃ作り、お茶の会①②、水海道ふれあいサロンの方々との七夕交流など子どもたちにとって、伝承遊びや季節の行事など豊かな実体験の機会となった。また、達目洞の自然を守る会、環境保全課など関連機関の方々との専門的な知識に触れ、身近な生き物に興味や関心をもち、主体的な学びに取り組む姿に繋がった。 ・コミ・スク活動の回数が増え、地域の方に親しみをもって名前を呼んだり話を聞いたりできるようになり、地域の人との結びつきは、年ごとに高まってきている。保護者や子ども達にも、地域の方との交流が定着してきていることで、地域の方や自分に関わる身近な人たちに愛されていると実感できる姿に繋がり、愛着や感謝する心が育ちつつある。	・コミ・スクを通した活動を更に、地域力を生かした活動となるように工夫をする。 ・園に地域の方に来園していただくだけでなく、地域の活動に参加したり、地域の子育てサークルなどでPRしたりして、幼稚園の教育を発信する場を増やす。
家庭・地域に開かれた園づくりの推進	・園の教育方針や子どもの育ちを保護者・地域・市民に対し、画像や動画を活用し、積極的な情報発信に努める。 ・園の教育活動について、教職員や保護者、学校運営協議会などによる学校評価を実施・公表し幼稚園経営の改善に生かす。 ・地域のとの関わり合いにより、自分が大切にされていることに気付き、安心、安定感をもって、相手を思いやる気持ちを育む。	B	・記者提供による新聞やメディア掲載は、多く取り上げられ、園行事や活動の発信につながった。 ・毎週配信するスマート連絡帳、ホームページによる通信や今週の１場面では、写真を多く取り入れるようにし、より多くの人に見てもらえるよう、内容やレイアウトを工夫したり、子どもの様子や育ちが伝わるようにしたりした。それにより、保護者が、園の教育内容を理解し、家庭での子どもの関わり方に影響を与えた。 ・登降園の際に、保護者に子どもの様子を伝えることで、育ちを共通理解し、家庭との連携を密にとるように心がけた。それにより、保護者が安心して子どもを預けたり、家庭でも園での遊びの続きをしたりするなど、協力体制が高まった。 ・保護者アンケートの結果を受け、園長が個別に懇談を行い、保護者の不安を取り除くことに努めた。 ・日常的に地域の「もの・こと・ひと」と触れ合う機会を大切にし、子ども達が愛着をもって関わる姿が増えた。	・教育内容や意図などをより保護者に伝わりやすい方法で発信するとともに、更に日常の生活の様子を共有する。 ・保護者アンケートの結果を、教頭が即時に開示し、園長、、主任、担任と共有し、保護者に真摯に向き合うことにより、不安を解決に導くようにする。
教育環境と幼稚園財務環境の整備及び効果的な活用	・感染症、熱中症など、子どもが安全に過ごせるための健康管理を養護教諭を中心に啓発・実践する。また、子どもたちが、自分の体の大切さを考えたり、気づけたりする機会を設け、よりよい対応や生活の仕方を身につけていく。 ・危機管理マニュアルや異常事案リスク回避の個別票などを職員に周知徹底し、危機管理意識の向上を図るとともに活用し、リスクの回避に努める。また、様々な事態を想定し、子ども、職員の危機管理の意識を高める。 ・備品、教材購入の際は、目的を明確にし、取扱いが適正であるかを確認する。マニュアルに基づき財務や納入金などの取り扱い、支払期限など複数で確認し、適正に実施する。	A	・感染症に対する予防や対策の標示をしたり、養護教諭による月１～３回の保健指導を通して、子ども達に伝えることで、子ども自身の危機管理意識が高まった。.基本的生活習慣は、家庭を巻き込みながら、年３回の『いきいきチェック』(早寝早起き、朝の排便、メディアに触れる時間の削減）及び、年３回の『けんこうせいかつカード』（はみがき、みだしなみ、感染症予防）を行い、指導したことを家庭で実践できるようにし、子どもだけでなく、保護者の意識が向上するなど、家庭教育力も高まった。また、年３回の『性の指導』では、自分のプライベートゾーンや、自分のルーツ、ジェンダーフリーについて知ることで、自分の身を守ることや、自分が愛されていると実感し、自己肯定感を高めることに繋がった。 ・命を守る訓練を積み重ねることで、各学年ともに、よく聞いたり、行動したりする姿が高まった。また、年長児は、なぜ危険なのか、どうしたらよいかを考えて危機管理意識を高めていけるよう、投げかけてきたことで、告知なしの訓練でも、自分で考えて行動する姿に繋がった。 ・教員間で、危険個所の確認、指導方法等、情報を共有して保育にあたった。遊具の使い方について、子ども自身が考えられるように話をしたり、こまめな見届けを行ったりすることで、子どもにも浸透している。 ・ヒヤリハット事案を職員間で共有し、その時の状況、背景、対応などを分析する。更に、同じ事案が起こらないようにするとともに、職員一人一人が危機管理意識を高める。 ・幼稚園で扱うお金は、公費や預かり金であることを意識し、こまめに在庫のチェックを行い無駄のないように使用や購入など適切な使用に努めた。 ・各職員が、納品のチェック、支払業務をスムーズに行えるように、繰り返し会計研修を実施し確認することで、適正な会計事務執行が出来るようになった。	・教育委員会や地域と連携し、早急に対応できるよう様々な情報収集に心がけ、更に危機管理意識を高めていく。 ・校区内の幼児施設と、災害時に地域の幼児を守るための支援の方法を探ったり、共有したりする等の連携を図る。

HPアドレス：yo-g-higashi@city.gifu.gifu.jp